

名称	せいせんじあと 清泉寺跡	区分		記念物		種別		史跡	
----	-----------------	----	--	-----	--	----	--	----	--

所在地	鹿児島市下福元町
-----	----------



<概要>
清泉寺は川辺の宝福寺の末寺で曹洞宗である。本尊は阿弥陀磨崖仏で高さ約2.7m、百済の僧、日羅上人の作と伝えられている。またとなり建長3年(1251年)の銘のある小磨崖仏もある。寺を建てたのは日羅上人と伝えられるが、一時すたれ、応永年間(1394年～1427年)に覚卍和尚が再興した。しかし明治2年(1869年)の廃仏毀釈で、廃寺となった。境内には石垣・覚卍和尚の墓、磨崖仏・五輪塔群などが残っている。
また、清泉寺は垂水の島津大和守久章が正保2年(1645年)自害した場所であり、久章とその家臣の墓碑があり、土地の人々は清泉寺のことを「大和さあ」と呼んで親しんで来た。島津久章は、第16代当主義久のひ孫で、第18代当主家久の娘をめとり、垂水の新城島津家の祖となった。寛永16年(1639年)第19代当主島津光久の命を受け江戸に行き、その帰り道、紀州家に立ち寄った際に、駕籠に乗ったまま玄関に横付け挨拶を行う等して問題を起こしたとされ、川辺の宝福寺に閉じこめられた。藩命で島流しを申しつけられたが、きかず、末寺谷山清泉寺に移された。そして、上意討ちにあい、亡くなった。30才であった。